

平成 29 年度全国学力・学習状況調査の結果の分析（小学国語）

学校名 小坪小学校

調査結果の概要及び教科の課題等（○良かった点や特徴ある点等 ●課題や改善点等）

<p>結果の概要</p>	<p>今年度も含めて過去 3 年間、A 問題では平均正答率は全国とほぼ同程度である。</p> <p>○B 問題については、平均正答率をみると、一昨年度が全国より 2.9% マイナスであったのが、昨年度は 0.9% プラス、そして今年度は 2.5% プラスとなっている。国語の学力は少しずつ上がってきていると考えられる。</p>
<p>話すこと 聞くこと</p>	<p>●B 問題では、平均正答率が全国よりやや低かった。「目的や意図に応じて、話の構成や内容を工夫し、場に応じた適切な言葉遣いで自分の考えを話す」という記述式問題で正答率が低かった。「目的や意図に応じて…」 「場に応じた適切な…」という条件の下で自分の考えを話すという力を付けさせるための指導法を、学校として工夫していかなければならない。</p>
<p>書くこと</p>	<p>A 問題では、平均正答率は全国平均よりも少し低く、逆に B 問題では少し高くなっている。</p> <p>○「目的や意図に応じて、文章全体の構成を考える。引用して書く」という問題では正答率は高かった。</p> <p>●「手紙の構成を理解し、後付を書く」という問題では正答率が低かった。</p>
<p>読むこと</p>	<p>○読むことに関しては、A・B 問題ともに、全国よりも高い正答率であった。「俳句の情景を捉える」「登場人物の相互関係や心情、場面についての描写を捉える」という問題などでは、全国よりも高い正答率であった。読書指導・読み聞かせ指導などの成果が出ているものとする。</p>
<p>伝統的な言語文化と 国語の特質に関する 事項</p>	<p>○ことわざの理解に関する問題では、非常に高い正答率であった。</p> <p>●漢字の書き問題については正答率が低く、無回答率が高かった。ある問題では、約 4 分の 1 の児童が無回答であった。今後、どのような問題であっても、あきらめずに回答をするという姿勢を指導していきたい。</p>
<p>児童質問紙 国語に関する質問</p>	<p>○「400 字詰め原稿用紙 2～3 枚の感想文や説明文を書くことは難しいと思う」「学校の授業などで、自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しいと思う」→ 思うと答えた率は全国よりもかなり低い。文章を書いたり、人に説明したりすることに苦手意識を持っている児童は少ない。国語に限らずさまざまな学習の場で、自分の考えを文章にしたり言葉で説明したりする活動を多く取り入れている成果だと考えられる。</p> <p>○「国語の授業の内容はよく分かる」に対し、そう思うと答えた割合は 46.3% で、全国よりも高い数字となっている。</p>

平成 29 年度全国学力・学習状況調査の結果の分析（小学算数）

学校名 小坪小学校

調査結果の概要及び教科の課題等（○良かった点や特徴ある点等 ●課題や改善点等）

<p>結果の概要</p>	<p>A・B問題ともに、平均正答率は全国よりも低い数値であった。 「量と測定」「図形」「数量関係」の小問で、いくつか全国平均を上回るものがあったが、全般的に平均を下回るものが多かった。 全体的に、無回答の割合が高かった。算数に対して苦手意識が強い児童が多いと考えられる。</p>
<p>数と計算</p>	<p>●基本的な計算問題で、ほぼ全国平均よりも低い正答率となった。これは低学年からの積み重ねが不十分であったものと考えられる。高学年の算数においては、それまでの学年の基礎基本がどれだけ定着しているかが重要である。各学年、それまでの学年での既習事項の定着度を確認しつつ、さらなる学習を積み重ねていかなければならない。</p>
<p>量と測定</p>	<p>○A問題で全国平均を上回った。「示された平行四辺形の面積の、半分の面積である三角形を正しく選ぶ」問題の正答率が高かった。平行四辺形・三角形の面積の求め方は定着している。</p>
<p>図形</p>	<p>○B問題の「与えられた情報から、基準量、比較量、割合の関係を捉え、「最大の満月の直径」に近い硬貨を選び、選んだわけを書く」という問題の正答率が約 20%という低い数字であったが、全国平均と比較すると上回っていた。</p>
<p>数量関係</p>	<p>●A問題では、「加法と乗法の混合した整数と小数の計算」「資料から、二次元表の合計欄に入る数を求める」という問題で正答率が低く、B問題では、「問題に示された二つの数量の関係を一般化して捉え、そのきまりを記述する」「仮の平均を用いた考えを解釈し、示された数値を基準とした場合の平均の求め方を記述する」という記述式問題の正答率がかなり低いものであった。また、これらの問題では無回答である率が非常に高かった。</p>
<p>児童質問紙 算数に関する質問</p>	<p>「算数の授業の内容はよく分かる」→ そう思うと答えた割合（38.9%）は、全国（47.6%）よりもかなり低い数字であった。ここ何年か、校内研究会のテーマを「自ら考え、すすんで取り組む子の育成」「筋道を立てて考え、表現できる子の育成」とし、特に算数の授業について教師の授業力向上を、また、一人ひとりの児童が算数の授業に楽しく取り組み、しっかりと理解できるような授業づくりを目指してきた。しかし、児童が「よく分かる」と実感している割合がまだ低いので、学校としてのさらなる指導法・指導形態等の工夫が必要であると考ええる。</p>

平成 29 年度全国学力・学習状況調査の結果の分析（児童質問紙）

学校名 小坪小学校

特徴的なことや課題と考えられること等

●「朝食を毎日食べている」「毎日、同じくらいの時刻に寝ている」「毎日、同じくらいの時刻に起きている」という基本的な生活習慣に関する質問には、いずれも全国平均よりも低い割合であった。「同じくらいの時刻に寝る」に当てはまると答えたのは約3割であった。基本的な生活習慣に関してはご家庭での指導の部分であるが、学校だよりや懇談会等で保護者の方に呼びかけをしていくなど、学校としても何らかの取り組みをしていきたい。

●「友達と話し合うとき、友達の話や意見を最後まで聞くことができる」という質問に、当てはまると答えたのは3割弱であった。全国平均の半分以下の数値であった。よりよい人間関係を築いていくためには、大きな課題であるといえる。

●「家で、学校の授業の復習をしている」は約7%。家庭学習をする習慣がない児童が多いのか、塾などで時間に余裕がないのか、さらに詳しく聞き取りをしなければ詳細は不明である。

●「学校のきまりを守っている」「人が困っているときは、進んで助けている」「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う」という質問に、している・そう思うと答えた割合は、全国平均よりもかなり低く、今後の学級指導や道徳の授業において、学校として意図的・計画的に指導を進めていかなければならない。

○「自分にはよいところがあると思う」の質問では、全国平均よりも高い5割弱の児童がそう思うと答えた。自己肯定感が高いということはとてもよいことである。

○「将来、外国へ留学したり、国際的な仕事に就いたりしてみたいと思う」の質問も、3割強の児童がそう思うと答えている。全国平均のおよそ2倍の数値である。保護者の中にも、そのような仕事に就いておられる方も多いのではないと思われる。

○? 「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりの勉強時間」では、3時間以上という児童が全国平均の2倍以上の約25%。また、「土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりの勉強時間」では、4時間以上という児童が全国の約3倍の2割弱であった。多くの時間を勉強に費やしている。学習時間を確保できているのはよいことではあるが、子どもへの負担も大きそうである。

平成 29 年度全国学力・学習状況調査の結果を受けての学校としての取り組み

学校名 小坪小学校

調査の結果を受けて、今後の指導改善に向けて学校として取り組むこと

国語科では、少しずつ学力が上がってきていると考えられる。児童質問紙の結果で、「国語の授業の内容はよく分かる」という回答が全国平均よりも高い 46.3%であり、児童自身が国語の授業に対して学力が身につけていることを実感していると考えられる。

また、「400 字詰め原稿用紙 2～3 枚の感想文や説明文を書くことは難しいと思う」「学校の授業などで、自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しいと思う」という問いに対して、そう思うと答えた率はそれぞれ 18.5%、3.7%となっており、全国よりもかなり低い数字であった。つまり、文章を書いたり、人に説明したりすることに苦手意識を持っている児童が少ない（得意だと思っている）ということを示している。これは、国語に限らずさまざまな学習の場で、自分の考えを文章にしたり言葉で説明したりする活動を多く取り入れている成果であると考えられる。今年度の校内研究会では国語科を取り上げて授業研究に取り組んでいるので、今後もこのような取り組みは大事にしていきたい。

昨年度まで 3 年間、校内研究は算数科の授業研究に取り組んできた。さらに今年度も、算数科では少人数授業を広く取り入れてきた（今年度は 2～6 年生で実施）。しかし、「算数の授業の内容はよく分かる」という問いにそう思うと答えた割合は 38.9%と、全国平均よりもかなり低い数字であったことと、A・B 問題ともに、平均正答率は全国よりも低い数字であったことを考えると、今後の課題は非常に大きいと考える。まずは、子どもたちが主体的に楽しく取り組めるような授業づくりについて、再度見直していきたい。

問題形式別に見ると、記述式問題の正答率が低く、無回答率も非常に高かった。算数に対する苦手意識があるためか、解答を導き出せずにあきらめてしまっている。

基本的な計算問題の平均正答率では、ほぼ全国平均よりも低い数字であった。低学年からの積み重ねが重要である算数において、基礎基本の計算力に不安があるということは大きな課題である。各学年・各単元において、基礎・基本の定着に関して、しっかりとこだわって指導していかなければならない。基礎・基本の部分でつまづいてしまっている児童に対しては、授業中の個別支援や、授業時間外の補習的学習の機会を設定するなど、工夫が必要である。

次年度より、新学習指導要領への移行期間となる。そこで示されている「主体的・対話的で深い学び」の視点をしっかりと意識し、教員の授業力向上を図ることで、子どもたちに本当の意味での学力を身に付けさせたい。